平成29年度 第4回小平市産業振興基本計画検討委員会 会議要録

１ 開催日時及び場所

日時：平成２９年４月１１日（火）午前１０時から１１時３０分まで

場所：小平ファーマーズ・マーケット「ムーちゃん広場」

２階　グリーンホール、パープルホール

２ 出席者

⑴ 委員

１０名

⑵ オブザーバー

多摩信用金庫 長島地域連携支援部長、板谷産業振興課長

⑶ 事務局

市　　：増原産業振興課長補佐、同石田係長、同鎌田係長、
同十河、同飯泉

多摩信用金庫：経営戦略室 中西調査役、地域連携支援部 嵯峨調査役、鈴木

首都大学東京：都市環境学部 太田特任助教

⑷ 傍聴者

０名

３ 配布資料

資料①　小平市産業振興基本計画検討員会委員名簿

資料②　ブレーンストーミングの議題についての考え方、ご意見

資料③　今後のスケジュール

４ 内容（議事要旨）

⑴ 委員、オブザーバー自己紹介

⑵ ブレーンストーミング

議題1雇用創出について

（委員長）雇用創出について皆様の意見を披露していただきたい。

（委　員）これまでの経緯を事務局から説明してほしい。「雇用創出」というよりも「歳入増」につながる施策の検討をするべき。創業支援や就労支援については、総合戦略でも議論されている。

企業誘致について検討すべき。その際大企業と中小企業を分けて考える必要がある。大企業誘致はトップ営業。中小企業については創業支援のほか、既にある会社を小平市に誘致するという考え方になる。その動機となるものとして、小平市にマッチする特徴のある企業、例えばICT企業はプチ田舎ともマッチする業界だと思う。ICT企業をお客さんとして地域内の経済循環を生むことが期待できる。

（委　員）企業誘致については、都心でも立川でも国分寺でもなく、小平を選ぶ理由や特徴が

必要。ひとつは家賃が安いというメリットがある。それを活かしてオフィスやデータセンターを整備することも考えられる。大規模な商業施設や工場は考えづらい。どちらかといえば、中小企業の誘致が考えられる。

（委　員）大規模な企業を誘致することは小平では考えづらい。ICTは可能性がある。地元の中小企業を育てるとういう考え方で、資本が小さい、人材が少ないという課題がある中で、いかに支援していけるかが重要。

創業者の支援が重要。特に女性が就労していくような場所、働きやすい場所、環境を作っていかなければならない。

（委　員）小平が選ばれるための魅力づくりがまず必要。魅力があるから人を呼べる。就労環境の改善が社会的な課題となる中で、女性が時短、育休など、就労環境の整備ができればよいと思っている。それを市外に告知していくことが重要だと思う。人が来る、というところまでいかなくても、少なくとも良いイメージを持ってもらうことが重要。

（委　員）「すだち」と「こだち」ができた。「すだち」は施設を作っている最中は子育てママの期待感が大きかった。しかし、出来上がってみると、コワーキングスペースは保育施設を利用できないため、小さい子どもがいるママは入居できないことがわかった。そういったママたちには、新しい施設を作ろうとする動きも出てきている。

「すだち」を中心に若いお母さんが集まってきて、少しだが学園坂商店街が活性化されている。そういった取り組みが他の商店街にも広がっていけばよい。

（委　員）雇用と企業誘致を考えたとき、都市計画の用途地域の問題から大企業の誘致は難しい。それよりも創業支援に力を入れた方が良いという結論を持っている。

商店街は空き店舗がたくさんあるので、居場所づくり、地域の方の活動を支援する場所づくりが必要ではないか。女性が子育てを終えた後に自分の好きなことをやりたいというニーズがあり、そのために商店街の空き店舗を活用していくことが大事。

（委　員）小平市に企業を呼ぶ、創業者を生むといたときに、何をポテンシャルとして感じるのかということは非常に重要。それが解明されてこないと、ターゲットを決めて誘致活動ということは難しいのではないか。

開業、創業について肥沃な土壌だと思う。その理由は、これまで順調に人口が増えてきたこと、それによって居住環境に配慮がされ整ってきた。このことが住民に評価されている。これが産業振興とどのように結びつくのかということ、医療、福祉、教育について評価が高いことをどのように創業に結びつけるのかということが重要。

交通は利便性が強みというところもあれば不便だというところもある。これをどのように捉えるか。

（委　員）ICT企業が立地する動機付けとしては、小平市と市民がICT活用の良いモデルとなることが重要。ICT誘致の政策は全国で行われているが、都心と地方に政策が集中してしまうと多摩地域周辺は政策が実施されない地域になってしまう。ICTについては小平市の他の長期計画では議論されていない。今回の委員会では、他の委員会などで議論されていない部分としてICTを議論したい。

（委員長）今までの議論を踏まえてオブザーバーから意見を。

（ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ）産業振興の目的は何かによって話がかわってくる。歳入増と住民が豊かになること

を分けて考えないといけない。

税収の大部分を占める大企業が出ていかないようにしていかなければならない。例えば駅の名前を企業名にするなども含めた戦略が必要。

コミュニティビジネスだけでなく、なにかしら特徴がある産業が一つできればよいと思う。それは農業かもしれないし、何か特徴ができればよい。

（副委員長）小平の持っている立地上の優位性は職住近接。ワークライフバランスが満たせる条件を持っているので、それを活かす戦略を考えるべき。

（委　員）JA東京むさしのなかでも農地面積が最も多い。従業員の中でも、小平に居住したいという人が多い。その理由は土地が平坦であることと、環境が良いということ。環境をよくしていくことで住民を増やし、それが雇用増にもつながっていくのではないか。

（ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ）小平を選ぶ理由が必要ではないかということだが、製造業の誘致については、都市計画上の理由から難しい面がある。今ある企業が操業しやすい環境を作っていくことが必要ではないか。小平の特徴は緑が多いこと、これは居住者にとっても企業にとっても同様である。また都心部へのアクセスが良いことも特徴。高速道路へのアクセスは悪いが鉄道が市内に７駅ある。この特徴を活かしていかなければならない。

多くの人が市内に通勤通学してきている。その人に小平市内でお金を落としてもらうようにしなければならない。

（委　員）なぜ、企業誘致が難しいのか。

（ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ）場所がないからだ。

（委　員）企業誘致は場所がないため難しいというが、場所を作ることを検討すればよいと思う。

議題2居住環境との融和

（委員長）議題２の居住環境の融和ということで、議論をしたい。

（委　員）小平の産業振興を進めていく上で、居住環境との融和は切っても切れない項目。基礎調査では自然と農との関わりが多いという項目の評価が良い。それをどう生かすか。満足感が高い項目は都心への通勤、子育て環境。一方で子育て世代の就業環境は不満が残る。これはなんとしてでも産業振興に結び付けなければならない大きな要素である。誘致をする際に、環境の良い地域での職住近接はアピールポイントになる。

（委　員）居住者が満足していることから、住環境が良いということはそのとおりだと思う。ただ、人口減少や高齢化が迫る中、もう一つ何かが必要ではないか。今、人が行きかう場所がなくなってきているように感じる。プチ田舎ということから、近隣の人が訪れるようになってくると、賑わいとか交流が生まれると思う。今の資源（交通の便が良い、や環境が良い）を活かせるだろう。それができてくると産業も活性化するのではないか。

（委　員）この点に関しては、今までの意見は一致していると思う。加えて産業振興を考えたとき、働く環境の良さ、働きやすい場所であるということもアピールした方が良い。「プチ田舎」という言葉は、響きは良いが外の人からわかるのか。もう少しわかりやすい言葉や数値化することによって、そのイメージを市外に人にわかるように発信す

るべきであると思う。

（委　員）働きやすい環境と言われると、オフィス環境を考えてしまう。

（委　員）中小企業と大企業は違うと思う。中小企業にとって職住近接は当たり前であり、住民と似たような生活をしている。その点で大企業とは異なっているかもしれない。

（委　員）人によって居住環境が良いと認識しているところが違う。そのため、このテーマについては意見を出せなかった。今住んでいる人にサービスを提供することが産業振興につながるのではなか。雇用者にとっては、回りに飲食店があって健康的な食事がとれるといったことが働きやすさにつながっていくのではないか。

（委　員）小平には地方のような観光はない。地域の人に小平の資源の良さを知ってもらい、それが口コミで近隣に広がって居住人口につなげるというのがスタンスである。特に食の関心が高く、女性のニーズが高い。小平をPRする際に食という資源を活かしていくのが一つの方向性である。

（委　員）周りでプチ起業するママの中で、食に関する起業をしている人は多い。シェアキッチンの卒業生で良い場所がないからという理由で他市で開業した人もいる。そういう人を逃さないようにすることが必要。

（委　員）小平駅を利用しているが、改札前に２店舗ある。その店で地域の特産物などを置いてみたらどうか。そういった取り組みを通じて、市内の人とともに市外の人にもPRしていけるのではないか。

小金井公園の桜祭りに行ったが、遠くの市から出店しているところもあった。ただ姉妹都市の北海道小平町の出店はなかった。せっかくなら交流のあるところをよんだらどうか。また、食フェスなどのイベントも開催してはどうか。

（委　員）小平町については、予算の関係で出店ができない状況である。農産物は単価が低いので難しい。ファーマーズ・マーケットでは生産が間に合わない状態で、野菜は良く売れている。

食育という点でも野菜が注目されている。

（委　員）工業、商業、住居の用途区分がこれからされる可能性はないだろう。ただ、これから企業を誘致したり、創業したりする際にどのように居住環境を保全していくかについては、地域ごとの住民と企業の理解と合意が必要となっていくと思う。産業振興単独で考えると難しい話であり、都市計画とうまく連携して進めていかなければならない。

（委員長）オブザーバーから意見を。

（ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ）小平の人が隣のまちで出店するケースはよくある。逆もある。企業は市境を考えていない。隣のまちとの関係を広く考えた方がよい。

（副委員長）小平市は防災面では良い環境にある。利便性についてはやや不満はあるものの、それほど劣っているわけではない。近隣との関係を含めて考えると悪くない。それを含めてPRしていくと良いと思う。

（ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ）住んでいる人は小平を自慢したいと思っている。帰省土産となる小平ブランドを作ってもらった。市民の方が外に誇りをもって進めて、市外から人が来ることによって交流が生まれ、産業が活性化すると考える。人が集まれば人やモノや金も集ま

る。住んでいる人が日用品を近くで買えるような、商店街を楽しめるような地域づくりが必要。

（委員長）住んでよかったと思う人がいることが大事で、そうであるから人が来るようになる。

（委　員）市内交通については、アクセスしやすい場所としにくい場所がある。市内交通のアクセス性が改善されれば良いと思う。

議題3商店街の活性化

（委員長）議題３の商店街の活性化について議論する。

（委　員）市内に30商店街あるが、機能していないところも結構ある。生活スタイルが変わったことが一番の理由。普段の買い物はスーパーに、休日は車で買い物。その結果商店が空き店舗となり、商店街が穴あき状態になってしまった。人気があるところが一部頑張っているという状況である。

買い回り品は国分寺や新宿などで購入している。商店街は整骨院や介護施設が並んでいる状態。ただ、商店街なので、人が行きかうコミュニティの場として活用したいという気持ちがある。学園坂商店街の「すだち」のようなコワーキングスペースができてくれば、若いファミリーなどが来るようになって、お店も少しずつできてくのかなと。また高齢者が集まる場所もできれば少しあった方が良い。コミュニティの場としての商店街を活かしたい。そういった側面から活性化することが大事ではないか。

（委　員）普段買い物をするのはスーパーで個店には入ったことがない。理由はスーパーやドラッグストアの方が金額が安く品揃えもあるから。小さな店に入る理由は店主との人と人とのつながりになるのではないかと思う。

シェアキッチンだけではなく、服やアクセサリーを作るママが多くいるので、作業スペースが保育スペースを併設してあればよい。

（委　員）商店街の一番の課題は空き店舗。今後減ることはないだろう。店舗は所有形態がそれぞれ異なり、２階の住居に住んでいて、店舗部分を貸さない人もいる。不動産業界とうまく連携をして、オーナーと借り手を結ぶシステムを作れないか。

他市では、オーナーと直接交渉して次の借り手が決まるまでの間、安い家賃で貸すということをしているところもある。地域貢献ができるということで、オーナーの理解も得ている。

（委　員）買い物は大手スーパーに行ってしまう。商店街に入ったことはわずか。20代が買うような服屋とかそういうものがある店を見たことがない。若者向けの店も一店舗でもよいのであると良いのではないかと思う。せっかく学生がいる街なので、学生を巻き込んでデザインなどについて参画してもらうのも良いのではないか。学生だけだと不安であれば、著名な方とのコラボはどうか。インターンシップの受け入れも商店街でできるのではないか。一日二日でも店員をやったりなどすると、馴染みがでてくるのではないか。

（委　員）食品は戸別配達を使っている。それに買い足したり、惣菜を買ったりするのに近

くの店を使っている。高齢化が進むと戸別配達が増えるだろう。

商店街の活性化と産業振興、農業振興をどのように結びつけられるかを考えることで、個別の商店街の具体的な活性化策を考えるべきではないか。商店街だけで活性化するのは難しいと思う。

（委　員）商店街ではなく、生活街にするべき。生鮮食品ですら商店街で買い物される割合があまり高くない。マーケティングの意識が必要である。生活街は時間消費（コミュニケーション）の場。最低限の日用品が購入出来て、一日一回商店街にいっておしゃべりをするような場であるべき。また、距離が長い商店街ではなく、短い商店街があっても良いのではないか。商店街は多機能化するべき。

（委　員）市役所に他市から来ている人に市内で消費してもらえればよい。商店街と農業分野の連携はうまく取れているかと思う。

（委員長）オブザーバーから意見を。

（ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ）商業は他の産業と異なり、買う人がいれば商業ができる。スポットが当たっていないのが大企業の従業員。そこにスポットを当てて、小平産の農作物をPRしたりすることが重要。

もう一つは中間支援が重要。「ムーちゃん広場」は中間支援の好例である。支援する人をうまく育てていけば、ベッドタウンでの産業振興がうまくいくのではないか。

（副委員長）10年前の商業振興のレポートでも同様のことが議論されており、その総括が必要ではないかと思う。

（ｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ）商店街の商店はきめ細かい対応が強みだと思う。大型店とどのようにすみ分けていくのかが重要だと思う。市内の飲食店の情報がほしいというニーズも高かったので、情報があれば利用も広がるのではないか。

創業支援については、やる気のある企業者に対しては補助を行っている。食についても支援していくように対応している。

（委員長）ブレーンストーミングでの議論を踏まえ、次回第５回では計画の骨子について議論を進めていきたい。これまでの施策、現行計画の総括について検討する。

(3) その他

今後の日程等について

事務局から、資料③を用いて、今後の日程等について説明した。

（委員長）次回は６月２７日１０時から開催する。それでは、第４回検討委員会を終了とする。

以　上